

179
74
52

至
同十二月
正元二年正月

東
鑑

卅九

新刊吾妻鏡卷第四十九

正元二年庚申

四月

三日

為文惠元年

正月六

一日 巳巳晴 境飯相州禪室 兩國司并評定衆

以下人人著布衣出仕列候庭上之儀如恒

武藏前司 尾張前司

相摸太郎 新相摸三郎

相摸三郎 遠江前司

陸奥左近大夫將監 越後守

彈正少弼 武藏左近大夫將監

尾張左近大夫將監 遠江右馬助

刑部少輔 越前守司



越後四郎

武藏五郎

遠江七郎

備前三郎

駿河四郎

越後又太郎

駿河五郎

新田三河前司

長井宮内權大夫

秋田城介

中務權少輔

武藤少丞

木工權頭

和泉前司

那波刑部少輔

小山出羽前司

後藤壹岐前司

伊賀前司

長井判官代

日向前司

安藝右近大夫

島津大隅前司

上総前司

周防前司

縫殿頭

甲斐守

後藤壹岐新左衛門尉

上総三郎左衛門尉

周防三郎左衛門尉

城四郎左衛門尉

筑前次郎左衛門尉

周防五郎左衛門尉

城六郎

周防六郎左衛門尉

筑前三郎左衛門尉

城弥九郎

筑前四郎左衛門尉

武部太郎左衛門尉

小野寺四郎左衛門尉

大隅藏人

常陸次郎左衛門尉

小野寺新左衛門尉

上野太郎左衛門尉

公羽七郎左衛門尉

善右衛門尉

和泉六郎左衛門尉

善次郎左衛門尉

遠摩七郎左衛門尉

和泉七郎左衛門尉

齋摩十郎

土肥四郎

内藤肥後三郎左衛門尉

狩野五郎左衛門尉

田次郎左衛門尉

伊勢三郎左衛門尉

狩野四郎左衛門尉

信濃次郎左衛門尉

鎌田圖書左衛門尉

肥後新左衛門尉

大曾祿太郎左衛門尉

信濃三郎左衛門尉

狩野帶刀左衛門尉

加藤左衛門尉

紀伊次郎左衛門尉

長内左衛門尉

大泉九郎

鎌田次郎左衛門尉

鎌田三郎左衛門尉

漕三郎左衛門尉

善五郎左衛門尉

駿河右近大夫

平賀四郎左衛門尉

出羽前司行義申時剋將軍家出羽前司御右衛門

督察進上御簾御劔武藏前司朝直御調度尾張前

司時章御行騰越後守實時

一御馬 遠江七郎時基工藤次郎左衛門尉高光

二御馬 武藏五郎時忠 安東新左衛門尉

三御馬 出羽七郎左衛門尉行賴 同九郎宗行

四御馬 城四郎左衛門尉時盛 同六郎顯盛

五御馬 伊勢次郎左衛門尉行經

同三郎左衛門尉賴經

其後覽吉書武州令持參給今日有御行始之體仍

任例進覽庭上座著例就御點催供奉人其間事以

上二藤三郎右衛門尉光泰奉行之平里左衛門尉

實後依有故障也未剋御出御車網箱

御劍役人

武藏前司朝直

御後

五位

相摸太郎時直

尾張前司時章

遠江前司時真

越後守實時

越前少司時廣

刑部少輔教時

遠江右馬助清時

武藏左近大夫將監時仲

陸奥左近大夫將監義政

彈正少弼業時

相摸三郎時利

遠江七郎時基

新相摸三郎時村

越後四郎時方

參河前司賴次

秋田城介泰盛

宮内權大夫時秀

和泉前司行方

小山出羽前司長村

後藤壹岐前司基政

木工權頭顯家

日向前司祐泰

武藏少弼景賴

上総前司長泰

甲斐守為成

六位

城四郎左衛門尉時盛

同六郎顯盛

式部太郎左衛門尉光政壹岐新左衛門尉基賴

和泉三郎左衛門尉行章

信濃次郎左衛門尉時清

周防五郎左衛門尉忠景

薩摩七郎左衛門尉祐能
一宮次郎左衛門尉康有

筑前次郎左衛門尉行賴

小野寺新左衛門尉行通

加藤左衛門尉景経

土肥四郎左衛門尉實経

出羽三郎左衛門尉行藤

常陸次郎左衛門尉

鎌田三郎左衛門尉義長

鎌田次郎左衛門尉行俊 武藤左近將監頼村

御引出物如例御劔刑部少輔教時砂金左近大夫

將監義政羽宮内權大輔時秀

一御馬 新相摸三郎時村 安保次郎左衛門尉

二御馬 筑前三郎左衛門尉行實

同四郎左衛門尉行光

三御馬 相摸三郎時輔 南条新左衛門尉

二日 庚午晴 境飯奥明神御簾左衛門督 御

劔尾張前司時章 御調度越前司時廣 御行

騰香秋田城介泰盛

一御馬 新相摸三郎時村

二御馬 備前三郎長頼

三御馬 薩摩七郎左衛門尉祐能

同十郎左衛門尉祐廣

四御馬 信濃次郎左衛門尉晴清

五御馬 周防五郎左衛門尉忠景

三日 辛未晴 境飯相州沙汰 御簾右金吾

御劔越後守實時御調度左江大夫將監公時御行

騰和泉前司行方

一御馬 遠江七郎時基 糟屋左衛門三郎行村

二御馬 式部太郎左衛門尉光政同右衛門次郎

三御馬 出羽九郎宗行 同次郎兵衛尉行藤

四御馬 城六郎顯盛 同九郎長景

五御馬 新相摸三郎時村 式部次郎左衛門尉光長

九日 丁丑晴 被行評定始

十日 戊寅晴 京都飛脚到著申云今月四日園

城寺三摩耶戒壇事被宣下之虞同六日卯刻 三基

祇園三基此野二基京極寺一基已上九基神輿入

洛奉振弁陳頭二基者奉振院御所云

十一日 卯晴 將軍家御參鶴置

御車庚

後藤壹岐左衛門尉基賴 加藤左衛門尉景經

城六郎顯盛 筑前四郎左衛門尉行佐

信濃判官次郎左衛門尉行宗

肥後新左衛門尉景茂 伊東次郎左衛門尉盛時

狩野四郎左衛門尉 薩摩九郎左衛門尉 伊勢三郎左衛門尉賴經

小野寺新左衛門尉行通

一宮次郎左衛門尉康有

鎌田三郎左衛門尉義長

平賀三郎左衛門尉維時

以上帶劔直垂候御車左右

御劔役人 布衣下拵

武藏前司朝直

御調等懸 布衣下拵

武藤左衛門尉頼泰

御後

五位 衣

尾張前司時章

越後守實時

遠江前司時直

越前守司時廣

越後右馬助時親

刑部少輔教時

遠江右馬助清時

尾張左近大夫將監公時

武藏左近大夫將監時仲

民部大夫時隆

彈正少弼業時

陸奥左近大夫將監義政

小山出羽前司長村

宮内權大夫時秀

木工權頭親家

秋田城介泰盛

參河前司頼氏

和泉前司行方

後藤壹岐前司基政

周防前司忠經

伊賀前司時家

上総前司長泰

甲斐守為時

日向前司祐泰

太宰少貳景頼

六位 布衣下拵

相摸太郎

同正郎宗政

同三郎利時

遠江七郎時基

越後四郎時方

新相摸三郎時村

備前二郎長頼

武藏五郎時忠

式部太郎左衛門尉光政城四郎左衛門尉時盛

遠江十郎左衛門尉頼連

隱岐三郎左衛門尉行景

伊勢次郎左衛門尉行經

筑前三郎左衛門尉行實

薩摩七郎左衛門尉祐能

土屋七郎左衛門尉行規

和泉三郎左衛門尉行章

善太郎左衛門尉康長

十二日 庚辰 於濱有御的射手之試被撰定其

射手十三人一五度射之

射手

一番

早河次郎太郎



九

澁谷左衛門太郎



八

二番

平嶋弥五郎



九

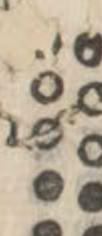
畠本新兵衛太郎



九

三番

佐貫七郎



六

藤澤左衛門五郎



六

四番

藤澤左近將監



八

海野矢四郎



八

五番

桑原平内



十

工藤弥三郎



八

六番

本間弥四郎左衛門尉



七

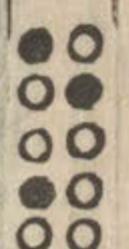
栢間左衛門次郎



九

七番

工藤八郎



三

十四日 壬午晴 寅尅雷鳴今日有御弓始二五

度也

射手十二人

一番

早河次郎太郎祐崇



九



九

澁谷左衛門太郎朝重



七



七

二番

平嶋弥五郎助經

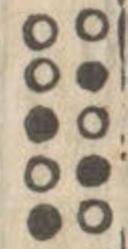


九



八

足本新兵衛尉重方



四



九

三番

佐貫七郎廣胤



七



七

藤澤左衛門五郎光朝



八



九

澁谷左衛門太郎朝重

二番粗

越前七司時廣 遠江右馬助清時

武藏五郎時忠 和泉前司行方

出羽大夫判官行有 和泉三郎左衛門尉行章

淡路又四郎左衛門尉宗泰

式部太郎左衛門尉光政

隱岐三郎左衛門尉行景

大須賀新左衛門尉朝氏

佐貫七郎廣胤 江戸七郎太郎長光

大泉九郎氏廣

三番寅

陸奥左近大夫將監義政 相摸三郎時輔

備前三郎長頼 小山出羽前司長時

上野大夫判官廣經 大隅修理亮久時

城四郎左衛門尉時盛周防五郎左衛門尉忠景

寺嶋小次郎時村 筑前次郎左衛門尉行頼

出羽七郎左衛門尉行頼

一宮二郎左衛門尉康有

本間孫四郎左衛門尉忠時

四番卯

新相摸三郎時村 越後右馬助時親

宮内權大輔時秀 木工權頭親宗

日向前司祐泰 城弥四郎長景

大曾祢太郎左衛門尉長經、上野十郎朝村
加藤左衛門尉景經、武石四郎左衛門尉景胤
阿曾沼小次郎光經、波多野小次郎宣經
小野寺新左衛門尉行通

五番辰

刑部少輔教時、遠江七郎時基

新田三河前司賴成、縫殿頭師連

美作兵衛藏人家教、城五郎左衛門尉重景

河越次郎經重、筑前四郎左衛門尉行佐

甲斐三郎左衛門尉為成、土肥四郎實經

善五郎左衛門尉康家、梳野四郎左衛門尉景成

二宮弥二郎時元

六番巳

越後守實時、同四郎顯時

後藤壹岐前司基政、武藏少弐景頼

上総前司長泰、佐渡五郎左衛門尉基隆

壹岐新左衛門尉基頼、伊勢三郎左衛門尉頼經

薩摩七郎左衛門尉祐能、肥後新左衛門尉景成

鎌田次郎兵衛尉行俊、澁谷三郎太郎重村

早河次郎太郎祐崇

右守次第各可令參勤之狀依仰所定如件

正元二年正月日

伏三日 辛酉 可禁遏殺罪輩之由有其沙休被

定事書云

一 六齋日并二季彼岸殺生事

右魚鼈之類禽獸之屬重命逾山岳身同入倫因茲罪業之甚無過殺生是以佛教之禁戒惟重聖代格武炳焉也然則并日之早禁魚網於江海宜停狩獵於山野也自今以後固守此制一切可隨停止若猶背禁遏有違犯輩者至御家人者令注進交名於凡下輩者可加罪科之由可被仰諸國之守護并地頭等但至有限神社之祭者非制禁之限矣

廿六日 壬辰晴 園城寺衆徒使者衆著申云今月四日當寺三摩耶戒壇事被宣下之處同十四日山徒院衆時餅申云同廿日被召返云刺可燒拂寺門之由山僧蜂起絆已為朝家勝事一寺滅亡

廿九日 乙未 去廿二日神輿歸坐同廿三日三

井寺衆徒分散云

二月小

二日 庚子晴 將軍家御方遣渡御二棟御所是

可被修理御所之故也今日小侍御簡有新加衆和衆前司行方傳仰於越州仍令平里左衛門尉工藤

三郎右衛門申沙汰之

二番 伊賀左衛門四郎 同六郎

四番 美作兵衛藏人

五番 木工權頭

三日 辛丑晴 依山門蜂起園城寺定有火災歟

可警固彼寺之由可相觸大番衆之旨被仰遣六波

羅云

四日 壬寅 出羽判官次郎兵衛尉加小侍御簡

五日 癸卯晴 酉剋故罌屋禪定殿下兼經公御
息女^御二十年為寂明寺禪家御猶子御下著則入御山
內亭是可令備御息所給云

十日 戊申晴 於寂明寺御亭將軍家御吉事有
其沙汰陰陽師晴賢晴茂宣賢文元依召染入各以
別紙奉日時勘文今月十四日壬子次吉三月廿一
日戊子吉云

十四日 壬子晴 將軍家入御寂明寺御亭戊剋
姬君御前有御除服之儀天文博士為親明臣勤御

被前兵衛佐忠晴朝臣候陪膳木工頭親家為役送
太宰權少貳賴景奉行之

十八日 丙辰晴 將軍家為覽櫻花御出永福寺
廿日 戊午 廂御所結番更被書改行方書之定

廂御所結番事

一番 自一日至五日

一条中將

越後守

尾張左近大夫將監

新相摸三郎

武藏八郎

武藤少貳

佐渡五郎左衛門尉

出羽三郎左衛門尉

小野寺新左衛門尉

上総太郎左衛門尉

鎌田三郎左衛門尉

一宮次郎左衛門尉

二番自六日至十日

阿野少將

治部權大輔

武藏左近大夫將監

備前三郎

和泉前司

駿河左近大夫

下野四郎左衛門尉

常陸次郎左衛門尉

城五郎左衛門尉

後藤壹岐左衛門尉

信濃判官次郎左衛門尉

平賀三郎左衛門尉

三番自十一日至十五日

中御門少將

宮内權大輔

陸奥左近大夫將監

越前少司

秋田城介

駿河次郎

武藤右近將監

薩摩七郎左衛門尉

出羽七郎左衛門尉

伊勢四郎左衛門尉

城弥九郎

大曾祢太郎左衛門尉

四番自十六日至廿一日

讚岐守

彈正少弼

相摸三郎

武藏五郎

後藤壹岐前司

出羽大夫判官

城四郎左衛門尉

信濃次郎左衛門尉

武藤左近將監

和泉三郎左衛門尉

鎌田次郎左衛門尉

狩野四郎左衛門尉

五番自廿二日至廿六日

中御門新少將

民部權大輔

遠江七郎

足利上総三郎

新田參河前司

兵衛判官代

式部太郎左衛門尉

大隅修理亮

筑前三郎左衛門尉

美作兵衛藏入

壹岐三郎左衛門尉

大泉九郎

六番自六月六日至晦日

二条少将

刑部少輔

遠江右馬助

越後四郎

木工權頭

圖書頭

城六郎

周防五郎左衛門尉

加藤左衛門尉

甲斐三郎左衛門尉

上總三郎左衛門尉

大土肥四郎

右守結番次第五箇日夜無懈怠可令勤仕之狀所

定如件

正元二年二月日

一日 戊辰天晴 吾宮別當僧正隆辨自京都歸

參是依園城寺三摩耶戒壇事去年九月十四日上

洛今年正月四日勅令奏達之勅許而山徒及強訴

之間同廿日被召及官府同廿一日寺門衆徒僧正

仙朝法印淨有忠尊以下僧經三十余輩衆會金堂

疑僉議同廿三日退散云

十四日 辛巳晴 日色赤将軍家中已御被為親

朝臣奉仕之薩摩七郎左衛門尉祐能為御使

十五日 壬午 日色赤但天陰紅霞厚之故以入

夜朧月珠晴四糸院御在位之時石清水行幸日有

此異云

十六日 癸未 為世上無為御祈禱於御所被始
行大般若御讀經云

十八日 乙酉天晴 於鶴屋八幡宮被修仁王會

廿一日 戊子天晴 風靜戌尅御息所入御先寄

御輿於東御亭相摸太檜皮寢殿妻戶東御方被參

諸相州武州被候之次自同西門平門出御雜色二

人取松明前行町大路南行入御所東門棟門經東

北庭將軍家於東侍密々御見西土御門中納言花

山院中納言一条少將雅有朝臣彈正少弼業時木

工權頭親家相摸三郎時利越後四郎時方前陰陽

少允晴宗朝臣等候其所寄御輿於中御所南渡廊

西向妻戶內東御方一条局同前

扈從

相州

雜色二人 人着直垂者 五人已下 皆布衣

武州

同相

武藏前司朝直

雜色二人 人童一人 着直垂者二人

尾張前司時章

左近大夫將監義政

同已上

相摸太郎殿

雜色二人 童一人

人着直垂者五人

相摸四郎

相並

此外

大曾祢太郎左衛門尉長頼

梶原太郎左衛門尉景經

對馬四郎左衛門尉宗經岩間平左衛門尉信重

筑前四郎左衛門尉行佐

鎌田圖書左衛門尉信俊

伊勢次郎左衛門尉行經
信濃次郎左衛門尉行宗

上總三郎左衛門尉義泰 大隅四郎左衛門尉

以上十八人著直垂列步御輿左右

此外越後守實時就催促進奉之處依妻室兩恟臨
期申障女坊東御方兵衛佐局周防局自閑路被參
進御膳東御方被候陪膳別當局兵衛佐局周防局
為役送吉時將軍家子直鳥帽土御門役御劔相
摸太郎殿獻御香給御傳母覆御衾取御香令退出
給
廿二日 巳丑晴 將軍家入御中御所但依為密
儀不及御儲等之沙汰

廿五日 壬辰晴 卯一點大震陰陽道之輩付勸
文於和泉前司行方

廿七日 甲午晴 將軍家御吉事有露顯之義相
別以下人々布衣參候未越入御中御處御直項之

有進物御劔武州砂金銀百兩並相摸太郎殿南庭同置
扇相摸四郎又女房一条局分砂金三十秋田城介

泰盛持參別當局南庭三官內權大輔時秀役之此
外賜風流續於女房之中又被下細櫃二合各

廿八日 乙未晴 和泉前司行方持參御息所御
眼月充註文出御所將軍家覽之

正月分

御小褂二陪織物 御表著物二陪織 重御衣上二陪

陪織物 御單 紅御袴 三御小袖 三御衣

二御衣 二御小袖二具 薄御衣 白御衣

御裳 色々御小袖五具 御夜衣 御明衣二

今木二具 御搦一束 御搦拂 御拂

御豐紙 御眉墨 御眉造 御楮

御白粉 御護

二月 二御衣 二御小袖色々御小袖五 御裳

三月 同二月

四月 御禪二陪織物 合御衣五唐織物綾練

更衣御單合御衣 合二御小袖 合御小袖三

紅御袴 御裳三

五月 御小褂二陪織物 御單 御捻重五重唐

十二陪織物九 御小袖單重 紅御袴 二生御衣

合御小袖二 御帷五 御裳三 生御夜衣

七月 御小褂二陪織物 御單重二陪織物九 御小

袖單重 紅御袴 生御衣 御帷七 御裳三

御明衣二 今木二具

九月 御小褂生二陪織物 生七御衣上二陪織物九 御

單生二御小袖八御綿 紅御袴 二生御衣

御小袖五 御裳三

以上七箇月可為真州禪門御沙汰

六月

御單重 生御小袖 白御袴 生御衣

御帷七 御裳二

八月

二生御衣 御單 生御小袖 白御袴 生御衣

衣 合御小袖三 御帷二 御裳二 御明

衣

十月

御小褂三陪繻物 八御衣上二陪繻物 御單二

御小袖 紅御袴 三御衣 薄御衣 二御

小袖 紅宿衣 色々御小袖五 御裳二

十一月

二御衣 二御小袖 色々御小袖五 御裳三

十二月同十一月

以上五箇月相州禪門御沙汰也

四月大

一日 戊戌 將軍家御吉事已後依可有入御于

入道陸奥守亭供奉人事有其沙汰如例召廻人數

記被下御點云雖被載其記今度漏御點人々

遠江右馬助 越後右馬助

駿河四郎 同五郎

武藏五郎

同八郎

那波刑部少輔

上総介

周防守

梶原上野前司

伊賀前司

甲斐守

長井判官代

城弥九郎

壹岐新左衛門尉

大隅修理亮

筑前三郎

同四郎

和泉六郎左衛門尉

同七郎左衛門尉

伊勢三郎左衛門尉

信濃判官二郎左衛門尉

式部二郎左衛門尉

武藏左近將監

伊賀式部八郎左衛門尉

小野寺新左衛門尉

伊東二郎左衛門尉

土肥四郎

肥後新左衛門尉

薩摩九郎左衛門尉

同十郎左衛門尉

大泉九郎

後藤二郎左衛門尉

相馬五郎左衛門尉

隱岐三郎左衛門尉

平賀三郎左衛門尉

狩野五郎左衛門尉

同四郎左衛門尉

筑前三郎左衛門尉

元自故障有事

式部太郎左衛門尉

眼目數相州之由申仍
有沙汰可憐之由被仰出

鎌田三郎左衛門尉

雖無沙汰為式部太弟左
衛門尉替可供奉之由追
被仰下

追加

信濃前司

駿河左近大夫

駿河次郎

二日 巳亥 御出事明日也而武部太郎左衛門尉外舅於老狹國他界事違期之後達遠門之間勘日數禁忌之殘日不樂之處有此御出事仍始者雖被仰可有憚之間今日有沙汰彼問鶴足別當申不可憚由之間可被召具者次以鎌田三郎左衛門尉可爲光政替之由雖被仰本人出仕之上不及子細云

三日 庚子晴 入御于入道陸與守亭御息所御同車供奉布衣

土御門中納言 顯方卿 花山院中納言 長雅卿

二条三位 教定卿 中御門少將宗世朝臣

前兵衛佐忠時朝臣 二条少將雅有朝臣

武藏前司朝臣 長御卿 遠江前司時直

越後守實時 刑部少輔教時

越前少司時廣 彈正少弼業時

左近大夫將監公時 左近大夫將監時連

新相摸三郎時村 相摸三郎時利

越後四郎顯時 遠江七郎時遠

和泉前司行方 秋田城介泰盛

宮內權大輔時秀 中務權少輔守教

出羽前司長村 壹岐前司基政

本工權頭親家 參河前司賴次

太宰少貳景賴 縫殿頭師連

對馬前司氏信 日向前司祐泰

武藤左衛門尉賴泰 下野四郎左衛門尉景經

式部太郎左衛門尉光政

常陸次郎左衛門尉行清

出羽七郎左衛門尉行賴

信濃次郎左衛門尉晴清

周防五郎左衛門尉忠景

上野三郎左衛門尉義長

遠江十郎左衛門尉賴連

伊勢次郎左衛門尉行經

大曾祢太郎左衛門尉祐能加藤左衛門尉京經

薩摩七郎左衛門尉長賴

小野寺四郎左衛門尉道時

鎌田次郎左衛門尉長義

鎌田次郎左衛門尉行俊

相州 武州 前尾州

雖載供奉故狀稱有所後不候臨次

相摸太郎殿同四郎等豫被參候御所義被在御衣

加等於出居輕御衣一具御衣指貫小袖十具七御

衣一具生御單御小褂紅御袴御小袖十具燃之御

不思酒之後奉御引出物御劔尾張前司時章砂金

越後守實時南庭秋田城介泰盛

一御馬 新相摸三郎時村 式部太郎左衛門尉

二御馬 武藏五郎時忠 淺羽左衛門二郎

三御馬 相摸太郎殿

波多野出雲次郎左衛門尉

御息所御方進風流造蓮女房中絹百疋公孫劔殿上人馬五六位者行騰也

六日 壬寅晴 自去年冬之比時行流布之間可被祈請之由被仰于諸寺云

十七日 甲寅晴 六波羅飛脚樂著申云去十二日丑尅院御所燒失云又山徒以血奉塗神輿之由同所注進也

十八日 乙卯晴 小臺所恪勤侍五人可令著到

之由云工藤三郎左衛門尉光兼平云左衛門尉實俊等奉行之和泉前司行方武藤少卿景賴依傳仰

也 恪勤

村星藤五六郎

同藤四郎

村正孫五郎

龜谷源次郎

入野平太

今日改元詔書到來去十三日改正元二年為文應元年文章博士在章撰進云依御即位也

十九日 丙辰陰 為武藤少卿景賴奉行可被始行御祈禱之由有其沙汰之處八專有憚之由陰陽

道依勘申被閣之云

廿二日 巳未晴 於政所被行改元吉書亦御祈

禱事陰陽道雖申于細殊被急思食重被經評定今

日始行松殿法印左大臣法印等奉仕之今日將軍

家御慰之間及戌尅於御所南庭被修千手法次始

行不斷千手隨羅尼若宮別當僧正隆率八口伴僧奉仕之

廿四日 辛酉 御惱事令復本御聞食御膳云

廿六日 癸亥 將軍家御惱事去夜女房尼左衛門督局有夢想一人僧告申云依嚴重御病不可入

幕中云仍今朝彼局語申夢中之間被尋右京權大

夫茂範朝臣之處將軍御居所者攝幕府法驗炳焉

之由申之

廿九日 丙寅 丑剋錄倉中大燒亡自長樂寺前

至龜谷入屋云

廿日 丁卯 天晴 今日評議員物事輒不及沙汰

之趣雖被定置歷弱之輩歎申之旨依被聞食及如

先々可有其沙汰云次評訟事不叙用三箇度者可

注進所帶之旨可成下御教書云

五月小

四日 辛未 故武別禪門御成敗事不及改沙汰

之間被載式月畢而同時重可有沙汰之由有所見

之輩者不拘此文可有其沙汰仁治三年以後給御

教書逐問答之疑者非沙汰之限今日被定之

十日 丁丑 晴 秋田城介入道覺智第三年追福

松下揮尼為施主被修之願文章右京權大夫茂範

朝臣清書本曼隨雜供大阿闍梨日光別當法印尊

家

十三日 庚辰 晴 子剋將軍家祿祿

十六日 癸未 雨降御惱御祈被行鬼氣并御夢
祭等

十八日 乙酉 雨降將軍家御惱令復本御
共月天

一日 丁酉 疾風暴雨洪水河邊入屋大底流失
山崩人多為磐石破厭死

四日 庚子 詔檢新事今日有被定之条且被仰
遣六波羅也所謂

一 國之守護人召進犯科人事
右召進關東無謂任彼定置之旨可被沙汰之由

可令相觸守護人但寄事於左右守護人致非據
沙汰之由詳申之時者可令尋成敗矣

一 可召關東犯科人事
右於訴重科張本者任先例可召進之至輕罪者

於六波羅可有尋沙汰矣

一 放免事
右於殺害人者日來十箇年以後隨所犯輕重雖

被免之於今度者諸國飢饉之人民病死過法之
間以別御計不謂年記無殊子細之輩者至當年

所犯者被放免畢焉
五日 辛丑 雨降被行止兩御祈安祥寺僧正良

瑜修一字金輪法今日被勅放生會供奉人散狀云
七日 癸卯 雨降未剋屬晴自去月十六日霖雨

不休今日適迎晴是偏法驗之所致歟

十二日 戊申 為人處疾疫對治可致祈禱之由
今日被仰諸國守護人云其御教書云十六日諸國寺社大般若經轉讀事

為國土安穩疾病對治於諸國寺社可被轉讀大般若經寂勝仁王經等也早仰其國寺社之住僧致精誠可轉讀之由可令相觸地頭等也只於地行所者同可令下知之狀依仰執達如件

文應元年六月十二日

武藏守 相摸守

其殿

十六日 壬子 放生會御參宮供奉人惣記目小侍被獻此狀是可令計沙汰給之由也而任例被仰

可進覽御所之旨及遣之云

十八日 甲寅 被付供奉人記於和泉前司行方而有被仰出杀之所謂天

可有御息所可御參宮事

相摸太郎

同三郎

元者可為隨兵

可為被御方御共者

武藏前司

為供奉人數雖有御合點可樂候迴席者

佐々木壹歧前司

雖有御點今度不可催者

小山出羽二郎

雖無御點可催加隨兵者

十九日 乙卯晴 於濱鳥居邊天文博士為親朝
臣奉仕風伯祭御使安藝右近大夫重親今度依御
氣色被用舊祭文云云

廿二日 戊午 相摸四郎可著布衣同三郎如元
可為隨兵之由云云

廿五日 辛酉晴 西剋京都飛脚參署自去十五
日一院令煩瘧御之由申之

廿六日 壬戌晴 為和泉前司行方奉行以來問
昨酉 院御惱事被行御占今月廿六日七日御減

之由勘申之其後薩摩七郎左衛門尉祐能為使節
上洛依院御惱也

廿日 丙寅晴 木工權頭親家為使上洛猶被申

御惱事之故也

七月小

二日 戊辰晴 京都飛脚到來院御不豫御減之
由申之御驗者左大臣法印近衛右府御息云云

四日 庚午晴 入夜雷雨今日三浦式部太郎左
衛門尉光政為使節上洛御惱減事依被賀申也

六日 壬申 為和泉前司行方奉有被尋問于越
後守實時相摸太郎主等事是去年被相催隨兵之

時入須賀新左衛門尉朝氏阿曾沼小次郎光經各
自由不參而愁以光經者著進子息五郎朝氏者立

弟五郎左衛門尉信泰於代官此事許容誰人計裁
者實時朝臣等申云以詞令申者傳者若無委細披

露歟退載狀可令言上者則歟狀付工藤三郎右衛門尉光泰先披覽于相州禪室之處被計仰云載狀之余頗以似嚴重歟只以光泰實俊等之詞屬行方諫中之条可宜歟者彼狀云

去年八月放生會御社參供奉人問被仰下兩条

一阿曾沼小次郎隨兵役以子息令勤仕申事

右所勞之由押紙于廻文之間言上子細之處以光泰實俊度々有御尋子細可令勤仕之由被仰下訖更非自由之計候

一 大須賀新左衛門尉同五郎左衛門尉等間事右於大須賀新左衛門尉有被下隨兵御點歟間催促候之處所勞之由押紙于廻文之間注申此旨候

之處現所勞之間御免訖次於五郎右衛門尉者本自被下直垂御點候之間勤仕訖此兩人事同非私計候以前兩条如此之由覺語候但曾臆申狀不定御信用候雖然如此事先々不及御書下候之間或引勘愚記或任御點註文言上子細以此趣可令披露給候恐惶謹言

七月六日

平時宗

越後守實時

送上和泉前前司殿

七日 癸酉 朝代光經等間事行方圍光泰實俊口狀披露云無殊事歟越州等書狀隨禪室嚴命留中申云

八日 甲戌 放生會供奉直垂著事為有御點撰
可然之輩可注造之旨去月十六日被仰下之間小
小侍所令清撰之一昨日進覽之間今日有御點為
令從從披次之云

十日 丙子 錄倉中僧許可鎮狼藉之旨被下御
教書云云

廿三日 己丑 小侍番帳更清書之雖被仰中山
城前司盛時依申所勞之由依藤民部大夫行轉又
奉仰所染筆也是以和泉三郎左衛門尉行章被下
廂御箱於小侍所廂與小侍每其番自一番至六番不參差
為同日之樣令結番之可書改之由依被仰下如此
云云且清書仁以前兩人可然之旨為相州禪室御計

云云

廿四日 庚寅晴 京都飛脚染著去十五日以後
院御瘡御更發之由申之

廿五日 辛卯晴 依御惱事信濃次郎左衛門尉
行宗為使節上洛今日薩摩七郎左衛門尉自京都
歸參又小侍番帳事有其沙汰於書樣雖為次第不
同之儀何無所思哉聊立次第可書改之由被仰下
云云和泉前司行方武藤少丞景賴等為奉行也是自
來從從番之體不云官位不論嫡庶且夜宿老旦隨勤

否被書云云

廿六日 壬辰陰 京都飛脚又到來去廿一日花

門院御婦將崩御之由申之

軍家御姑

三十一

廿九日 乙未晴 中御所番衆者可著到干廂御所之旨和泉前司行方奉行相觸工藤三郎右衛門尉光泰平里左衛門尉實俊云午對京都龜脚到著院云瘡病去廿一日平復御驗者道性僧正云今日御息所入御相州禪室御亭供奉入

越前七司 刑部少輔教時
尾張左近大夫將監公時 新相摸三郎時村
相摸三郎時村 陸奥左近大夫將監義政
壹岐前司基政 和泉前司行方
出羽大夫判官行方 式部太郎左衛門尉光政
城四郎左衛門尉賴泰

大曾林太郎左衛門尉長賴
武藤左衛門尉時盛 上總太郎左衛門尉長經
和泉三郎左衛門尉行章
常陸次郎左衛門尉行清

八月大

二日 丁酉晴 式部太郎左衛門尉自京都歸樂

五日 庚子晴 申刻甚雨大風人屋多以破損成云越瓜休地震

六日 辛丑 相摸三郎外祖父卒之間輕服云

七日 壬寅晴 將軍家煩赤痢病御仍為相摸太郎殿沙汰彼行如法泰山府君祭為親朝臣奉仕之

御使狩野四郎左衛門尉

八日 癸卯晴 依御惱事以七日碩德被修七座法

安祥寺僧正松殿法印勝長壽院法印左大臣法印

已下也

十二日 丁未晴 依御惱事為相摸太郎殿御沙

汰一日中被造立藥師像將軍家御等身供養導師尊家法

印又被始行藥師法今日有被仰遣于六波羅事其

御教書云

同註以後追進狀事不進證文之外於誰陳者不

及沙汰之由被定畢而進覽間同註記具書之時

每度被制進追狀之余違傍例非無沙汰之煩於

自今以後若證文之外不可副進新陳之狀若令

備進簡要證文者遂覆問可令副進彼證文之狀

依仰執達如件

文應元年八月十二日

武藏守 相摸守

陸奧左近大夫將監殿

十五日 庚戌晴 鶴足放生會將軍家無御參官

赤痢病御惱不輕之故也武州為御使被神拜舍弟

左近大夫將監義政并相摸四郎和泉前司行方太

宰權少貳景賴壹政前司基政縫殿頭師連上総前

司長泰等參廻席

十六日 辛亥陰 武州參官同昨將軍家雖無御

出馬場之儀棧敷等如例大夫判官行有大夫判官

廣經大夫判官行氏等警固馬場

十七日 壬子晴 依將軍家御惱於御鞠壺天文

博士為親朝臣勤如供泰山府君祭鞍置馬一疋鎧

弓箭等為相摸太郎殿御沙汰被奉之御雙紙箱入

袋自御所被出之

廿日 乙卯晴 將軍家御惱聊令屬減御

廿五日 庚申 依可有二所御參詣供奉人等有

其沙汰且書於先日御點人數可令漁之由被仰小

侍所行方傳達之云宗像六郎子息童形号如點御

調度懸可供奉之由被定云

廿六日 辛酉 雨降將軍家御除服為親朝臣尅

勤御枝陪膳讚岐前司忠時朝臣布衣役送近江前

同季實

九月小

五日 庚午晴 辰尅將軍家御沐浴御驗者醫陰

之輩等預祿於鞠御壺有其儀權侍醫長世前陰陽

大允晴茂朝直各賜御衣一領御劔一腰坊門三位

直基卿取御衣給兩人薩摩七郎左衛門尉祐能引

御馬置鞍亦被召彼兩人於中御所給御衣次召為

親朝臣以女房別當局給銀劔一腰松殿法印良基

依燕用意早出之間被送遣御衣尙劔御馬一疋置鞍

於伴宿坊和泉前司行方為御使又於御所被修北

斗法七箇日若宮別當僧正桑仕之

十月小

八日 壬寅 旱河役三郎被召加小侍番帳武藤少卿具賴傳仰云

十五日 巳酉 相州 政村 息女煩邪氣今夕殊惱

亂為比企判官女讚岐局靈崇之由及自託云件局

為大地頂有大角如火炎常受苦當時在比企谷土

中之由發言聞之人豎身毛云

廿二日 丙辰晴 貢馬御覽相州武州巴下出仕

如例

十一月六

八日 辛未 深栖兵庫助孫平嶋藏人太郎重頼

入小侍番帳和泉前司行方奉仰觸小侍云

十日 癸酉 明年御的始射手事被差定之相摸

太郎殿越後守等被下奉書

十一日 甲戌 二所御參詣事來十九日可被始

之仍供奉人間事可被催促之趣和泉前司行方奉

仰觸申越功弁相摸太郎殿而殊相雲客事者就為

御前奉行沙汰任例可令行方催促之處加于小侍

奉行事申可被催由之余躬宿德令也已背兩人所

存之間忽被返遣彼公孫等散狀於行方云其狀云

二所御參詣供奉人間事仰給之趣不得其意候
之間所給之註文等返進候恐々謹言

十一月十二日

時宗

和泉前司殿

實時

十六日 巳卯晴 亥尅雷鳴數聲

十八日 辛巳 二所御參詣精進事明日者延引
可為廿一日之由給定仍武州被觸仰其趣於小侍
所周東兵衛五郎為御使又來廿二日御息所為御
見物始御濱出之體密之可令出于小山出羽前司
老官大路家御除二所供奉人可差進仰宜供奉人
由武州同令下知給云
十九日 壬午 來廿一日為令浴精進潮御濱出
事御所中御精進御息所明日可出池所給事兩条
有其沙汰供奉人各可為直垂折烏帽子之由被相
觸且所被下御教書也今夕二所御參詣之間步行
供奉人等事於御前有御沙汰新右衛門督花山院
中納言後藤壹岐前司武藤少丞等候其砌云

廿日 癸未 御物詣供奉之間領狀輩之中一兩
輩有申障事所謂

後藤二郎左衛門尉

只今輕服事出來之由申

上總三郎左衛門尉

俄所勞之由申

廿一日 甲申 將軍家依可令始二所御精進御

中御所入御陸奧入道亭供奉人

相摸太郎

同四郎重政

同三郎時利

同七郎宗頼

越前々司時廣

尾張左近大夫將監公時

遠江右馬助清時

陸奥左近大夫將監義政

彈正少弼業時

越後四郎時方

木工權頭親宗

壹岐前司基政

上総前司長家

武藤少卿景頼

出羽大夫判官行有

式部太郎左衛門尉光政

城四郎影盛

和泉三郎左衛門尉行章

周防五郎左衛門尉忠景

武藤左衛門尉頼家

信濃次郎左衛門尉時清

大曾林太郎左衛門尉長頼

薩摩七郎左衛門尉祐能

廿二日 乙酉晴 將軍家被始二所樂詣御精進

仍為令必潮御有出由比浦之間為御見物中御所

入御于小山出羽前司長村若宮大路之家

御興

三浦六郎左衛門尉頼盛

大遠江十郎左衛門尉頼運

大佐々木對馬太郎左衛門尉頼氏

各列步御
典左右

大新相摸三郎時村

遠江七郎時基

以上御
典寄

大宮内權大輔時秀

秋田城介家盛

大對馬前司氏信

加賀守行頼

大丹後守頼景

城四郎左衛門尉時盛

大同孫九郎長景

大申對御出

御手水
列與馬

供奉孫相雲客皆著水干其外

武州相摸太郎殿以下者直垂還御之時者公私淨

衣云

廿四日 丁亥天晴 將軍家中潮御演出

廿六日 己丑晴 玄番頭丹波長世去十五日叙

位四位上仍今日持參彼除書出於御所是去八月
將軍家御惱施醫療之賞也其由有

廿七日 庚寅晴 卯刻將軍家御參鶴足宮辰尅

二所御進發

供奉人不被立

先陣隨兵十騎

次御引馬

次御弓袋差

次御甲著

次御曹持

次御小具足持

次御調度懸

次御共連

伊豫法眼教尊

次御駕

後藤壹岐左衛門尉基賴

薩摩七郎左衛門尉祐能

同十郎左衛門尉 周防五郎左衛門尉忠景

上總太郎左衛門尉長經

甲斐五郎左衛門尉為定

美須賀五郎左衛門尉信泰

武石新左衛門尉長胤

隱岐三郎左衛門尉行氏 同四郎兵衛尉行廣

伊東次郎左衛門尉盛時

佐渡左衛門六郎基秀

鎌田三郎左衛門尉義長

平賀四郎左衛門尉泰實

薦西又太郎定廣

鎌田次郎左衛門尉行俊

大泉九郎長氏

次御劔役人

以上步行候御馬左右

太宰少貳景頼

次御後

新右衛門督顯方

讚岐守忠時朝臣

二条少將雅有朝臣

殺原右衛門尉定神

小河左衛門尉時仲

平賀左衛門尉實俊

范山院中納言長雅

中御門新少將實隆朝臣

左近大夫將監義俊

彈正少弼業時

越前今司時廣

尾張左近大夫將監公時

相摸四郎宗政

越後四郎時方

武藏五郎時忠

壹岐前司基政

木工權頭親家

刑部權少輔政茂

伊賀前司時家

周防前司忠經

上總前司長泰

出羽大夫判官行方

隱岐大夫判官行氏

甲斐守為成

平葉介頼胤

圖書頭忠茂朝臣

權天文博士為親朝臣

玄蕃頭長世朝臣

安藝右近大夫親經

能登右近藏入伴宗

上野三郎國家 阿曾沼小次郎光經

大須賀新左衛門尉朝氏

藤田圖書左衛門尉信俊

進三郎左衛門尉宗長

後陣隨兵十騎

今日相刈 政村 被頓寫一日經是息女惱邪氣依比

企判官能負女子靈託為資御苦患也入夜有供養

之儀請若宮別當僧正為唱導說法殿中件姬君惱

亂出舌紙脅動身迹足偏似蛇身之令出現為聽聞

靈氣來臨之由云借正令加持之後惘然而止言如

眠而復本云

廿八日 辛卯晴 御奉幣菅根御山衆徒等湖上

浮船近年垂髮翻迴雪之袖盡歌舞之曲

廿九日 壬辰陰 夜半令詣三嶋社御之奉幣曉

天云

卅日 癸巳 雨降御參伊豆山

十二月小

一日 甲午 兩降已尅御奉幣伊豆山則御下向

御夜宿土肥縣當所御所獻餉等極美盡善甚雨源

佐之間為御休息御逗留土肥鄉

二日 乙未陰 御止宿酒勾驛相摸國御家人群

參此所

三日 甲辰晴 將軍家還御于鎌倉御所御奉幣

無為

十六日 巳酉 明年正月御弓始射等事被差
定之處稱所勞由障之輩相交之間今日於小侍所
相摸太郎殿越後守等經談合自由對捍不可然內
調之時企案上可申子細之肯被下御教書云又武

別長時頓病辛苦云

十七日 庚戌 梶原上野六郎被加小侍番帳武

藤少弼景賴傳仰於小侍所云

十八日 辛亥晴 依將軍家御願被供卷八萬四

千基塔導師專家法印

廿日 癸丑陰 酉越御所東侍隨羅尼衆休所為

飛入御慎之由陰陽道等勘申之

廿一日 甲寅晴 入道右大辨光俊朝臣法名真親光親

卿息自京都下著當世歌仙也

廿三日 丙辰 小雨降右大辨禪門始出仕和歌

真行盛也

廿四日 丁巳 寅越武州病患屬減氣汗太降云

廿五日 戊午 京上所役事有其詞然今日被定

法云

一京上役事付大番役

諸國御家人恣之錢貨之夫馱亥巨多用途於貧

民等致呵法譴責於諸庄之間百姓等及侘際不

安堵由遍有其聞然則於大番役者自今以後改

別錢參百文此上五町別官駈一疋人夫二人可

亥催之於此外者一向可令停止也令送下負數

以後於日來沙汰所之者就此負數不丁加增也
一地頭補任所之内御家人大番役事

先々御家人役勤仕之輩者可為守護催促也

又將軍家明日依可有御方違供奉人事如例以御

點被催之武藏前司尾張前司越後守等者無可候

催諸御所之旨被觸作訖武州者日來勞越列者心

神聊有違亂之事旨言上云

廿六日 己未晴 依去廿日鷲怪被行百怪祭今

夜將軍家御方違于相摸太郎殿御亭中御所

御同車八葉

供奉人

刑部少輔教時

遠江右馬助清時

彈正少弼業時 相摸三郎時輔

同七郎宗頼 新相摸三郎時村

越後四郎時定 武藏五郎時忠

宮内權大輔時秀 秋田介泰盛

壹岐前司基政 木工權頭親家

和泉前司信方 上總前司長泰

武藤少弼景頼 出羽大夫判官行有

隱岐大夫判官行宗 式部太郎左衛門尉光政

城六郎顯盛 信濃次郎左衛門尉晴清

薩摩七郎左衛門尉祐能 加藤左衛門尉景經

周防五郎左衛門尉忠景

以上立烏帽子直垂

廿七日 庚申晴。松殿法印良基六八是將軍家
御惱之時御祈賞今月十六日任權僧正聞書今日
到來鬼付御驗者賣云則參賀御所土御門中納言為申次
廿九日 壬戌 明春正月朔可有御行始供奉入
事可相催之由武藤少丞傳仰於小侍所而為境飯
出仕人々於御所庭上兼取座藉所差並札也仍光
參實俊行向其所就札所見註文名進上申下御點
相觸其旨云

新刊吾妻鏡卷第四十九

